

学位審査報告書

(ふりがな)	なかにし ゆきのぶ
氏 名	中西 之信
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 472 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年7月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
(学位論文題目)	
失語症者における “「言葉の世界」へ戻る仕事” ー「話せない」／「話せる」とは如何なることか	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 新宮 一成 副査 教授 岡田 敬司 副査 教授 山梨 正明

(論文内容の要旨)

本論文は、「言語を使う」ことの障害である失語症を被った時、人間(失語症者)はどのように行動し、「言葉の世界」との関係をどのように取り戻そうとするのかを、事例を取り上げ、フロイト-ラカンの精神分析の視点から彼らの無意識的言語活動の作用に注目し、考察したものである。

序章「失語症者の「無意識」～「話せない」／「話せる」再考」。

ここでは、通常の道具論的な言語観では見落としてしまいがちな、失語症者における言語への態度の多様性が指摘されている。

失語症の臨床では、「失語症が改善すれば話せる」、「重度の失語症だから話せない」などと単純には言えず、逆に「失語症が改善しても話せない」、「重度の失語でも話せる」と言えるような事例を経験する。失語症治療の一般的指針である「言語機能がどれほど改善するか」、「実用的なコミュニケーション能力がどれほど向上するか」といった側面は、むしろ“日常生活・社会生活上での「話せる」／「話せない」”に関係する。しかし、完治のない失語症のまま“「言葉の世界」との関係を如何に取り戻すのか”には本質的に関与しないと考えられる。失語症者における「話せる」／「話せない」にはさらに別の次元も存在するのではないか。以下の各章ではこの問いをめぐって検討した。

I章「話せないまま話す」(1)～描画による無意識的言語活動の作用。

この章では、全失語事例における「言葉の世界」へ戻る仕事が生じることが記述される。事例が如何にして重度の失語症のまま、すなわち話せないまま、「話す」次元へと至ったのか、治療関係の中で生じた事例の描画活動の変化を辿ることにより検討した。事例の描画には、全失語を被ったことによる「無力な受難」という原初の状況から、再び「言葉の世界」へ戻るまでの無意識的な作業、即ち、「他者の語らい」の中での自己の位置の再発見が示されていると考えられた。

II章「話せないまま話す」(2)～神経症的危機を越える選択。

次に取り上げられるのは軽度Broca失語の事例である。この事例では、I章の事例では見えてこなかった、完治への拘りという神経症的な危機が認められた。治療者は言語訓練を中心とはせず、精神分析的視点・態度をもって治療に臨んだ。事例が如何にこの神経症的危機を乗り越えたかを、転移の変化に注目し考察した。失語症により病前と同じようには話せなくなるとしても、無意識のうちに回帰してくる原初の「話せない」存在が再び抑圧され(これは精神的に「疎外」と「分離」と呼ばれる)、神経症的危機が克服されるなら(すなわち「同一化」という平面の乗越えである)、失語症者は、失語症のまま、即ち「話せない」ままでも、「話す」ことの主体性を取り戻すことができると考えられた。

III章「話せているのに話せない」～神経症的選択。

「言葉の世界」へ戻る仕事がいわば途中で滞ってしまう失語症者も存在する。この章で検討されているのは、「言葉の回復」に過剰に固執し、他のことへは気が向かず、実際にはある程度「話せている」のに「全然だめです」、「全く話せない」などと言いつけた中等度Broca失語の事例である。「言葉の回復」への固執は、「話せる」ことへの意識的な願望と「話せない」ままでもいいとい

う無意識の欲望との心的葛藤の妥協の産物、即ち神経症的な症状であると考えられた。私たちが普段抑圧している、自らの失われた起源である「話せない」存在の世界は、「話せない」と「話すこと」が等価であるような「起源の言語」の世界ともいえる。事例は、失語症によって生じた「話せない」という危機を克服しようとするに際し、そうした「起源の言語」を抑圧し切れず、無意識のうちに欲望し続けていたと考えられた。この事例における治療上の困難も、こうした神経症的方略に由来していたと考えられた。

IV章「話せないまま愛されたい」～倒錯的選択。

失語症者のなかには、時に、病識があっても話せないことをそれほど苦にせず、安定していると思われる人がいる。この章では、そうした失語症者の姿勢が如何にして生じるのか、如何なる意味をもつのかということが、重度失語の事例を通して検討される。事例は、「言葉の世界」との関係を取り戻すために、倒錯という構造によって、「話せない」ままであることを欲望していると考えられた。倒錯における「自我分裂」の状態によって、一方で「話せない」ままでいようとしつつ、他方で「話しかけられる」ことを受け入れ「言葉の世界」へ留まることが可能になっていた。こうした方略も、失語症者が失語症のままで生きるための選択肢の一つであろう。

終章「話せない」／「話せる」とは如何なることか。

失語症は、意識的な努力では解決困難な事態であるがゆえに、無意識的言語活動が失語症者において活性化する。彼らはこの無意識の活動を通して「言葉の世界」との関係を取り戻そうとする。本論ではこの仕事には三つの道があることを見出すことができた—「話せないまま話す」（神経症的危機を越える選択）、「話せているのに話せない」（神経症的選択）、「話せないまま愛されたい」（倒錯的選択）。これらの選択肢の違いは、失われた起源としての「話せない」状態と、主体との間の、無意識的関係の構造的相違により生じる。失語症者が「言葉の世界」においてどのように「話せる」者、あるいは「話せない」者として振る舞うかは、これらの選択肢によって決定されることが考えられた。こうして、「言語を使う」という活動は、人間にとり、「人生上の困難」に出会うたびに、更新し再構造化されるべき性質を帯びたものであるという、人間の発達と言語との関係をめぐる考察で、本論文は締めくくられる。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、失語症の臨床において、言語を使う可能性を病によって制限されたとき、人が単に言語の能力を道具的に修復しようとするのみならず、たとえ障害が残っていても言葉の世界へのつながりをそれぞれの仕方で作り上げる作業を行うということを観察し、さらに、人間と言語との関係においては、人間が言語を用いるという事実があるだけではなく、むしろ言語が人間らしさを形成しているという側面があるということについて考察を加えたものである。

言語と人間の関係は、人間の発達途上において、意識的な自我が発達してくる以前に存在している。申請者はこの事実に留意して、失語症を蒙ったときに、人は無意識的な努力を、言語との関係を再構築するために行わねばなくなると洞察する。この無意識的な努力は、「言葉の世界へ戻る仕事」と名づけられる。そして、精神病理的な現象を参考にして、この無意識的な努力がいくつかの型に分けられるのではないかと考え、この努力に関しての理解を深めて行こうとする。

申請者によるこの試みの根底には、言語聴覚士としての臨床経験が存在している。失語症の患者による、言葉をしゃべれなくなったときに「人間ではない」あるいは「人間を否定されている」と感じたという陳述が物語るように、人間としての自覚は、言語活動に参画していることによって支えられている面が大きい。申請者は、失語症の患者の苦しみを、人間であることをおびやかされた状態として共感的に捉えている。

こうした臨床的な態度に立ちながら、申請者はまず、人間関係の中に戻って行こうとしたある患者の無意識的な作業を、患者の描画から再構成する。それは、生まれ直すこととして始められ、多くの人々の群れの中に、自分の位置を見出すという形で営まれた。この患者の失語症は重度であり、日常的な意味では、患者が言語能力を取り戻せたと言うことは難しい。しかし、生まれ直すことは、描画において水中から患者が出てくことに、また、人々の中に自分の位置を見出すことは、不気味な群衆の絵が次第に家族の絵に変わりその中に患者の像が描かれたことに、非言語的に反映されていると解釈される。患者の生活の様子を観察した申請者は、患者が、内面的な再構築によって、言葉の世界へ戻る仕事を行ったと論じている。これは、話せないままに「話せる」ことへと至った例として類型化されている。

失語症を蒙った患者は、失語症と共に生きて行くことを強いられるが、完治をめざして言語訓練に取り組もうとすると、それが神経症的な危機を招くことがある。そのことを申請者は臨床経験から指摘し、こうした神経症的な態度は、言語との関係を再構築しようとする無意識的な作業の一つの変異型であると考察する。次に記述される事例では、患者はこの危機を乗り越えて、「言葉の世界へ戻る仕事」を遂行した。

その事例では、印象的な変化が報告されている。その患者は繰り返し、閻魔様と取引する怖い夢を見ていた。「足はいらなから、命をください、と閻魔様に言う。てっきり足は閻魔様のものだと思っていた。」そして、息子の名前

が言えるようになると、この夢を見なくなったのである。申請者は、人間が言葉の世界へ入る時には、不可避免的に何か失われるとする精神分析的理論をここに適用する。申請者は、その場合に失われるのは、「話せなくても」生きている自己であると考え。すなわち、話すことを必要とせずに過不足なく生きることが、生命体としてのある種の理想を表現するものである。このような自己が失われることは、精神分析的理論において「疎外」と呼ばれ、また、その自己が別の形で「言葉の世界」の中で対象化されて取り戻されることは「分離」と呼ばれる。申請者は、この事例は、こうした「疎外」と「分離」を経て、話せなくても生きている理想状態を抜け出て「言葉の世界へ戻る仕事」を果たしたと論じる。

「言葉の世界へ戻る仕事」がこのように長い時間をかけてなされるという観察からは、逆に、その仕事が途中で停滞する事例があることをも予測させる。申請者はまさにそのような例を、「話せているのに話せない」逆説的な事例として呈示する。失語症にかかった人間は、むしろそれが治ることを望み、完全治癒が無理ならばできるだけ元の状態に近いところまで回復することを願う。しかしながら、完全治癒がきわめて困難なこの疾患において、それに近い治癒を果たさなければならないと自分を追い込む場合、そこに働いているのはむしろ、「話せなくても」過不足なく生きている理想的自己への退行と、それへの固執である。この固執によって、リハビリが進んでも、それを自己評価できなくなってしまうことがある。

さらに、重度の失語で、「話せなくても」生きている、すなわち実際の言語能力がきわめて制限されていても、その状態をありのままに生きることのできる患者の存在がある。それは、話せなくても生きていられた生まれたての存在のように愛されるという術が人間にはあるからである。こうした選択が臨床において時に可能であることを申請者は事例によって示し、この可能性は、一方的に「話しかけられる」ことを受け入れることによって成り立つと観察する。これは構造的には話す主体の「倒錯」と名づけることができると論じられる。

このように本学位申請論文は、豊かな臨床経験を慎重に活用しながら、人間が言葉を失った時に、もう一度「言葉の世界へ戻る仕事」を無意識的なレベルで遂行することを明らかにしている。その際に、人間の自覚にとって本質的な言語との関係が、いくつかの型を通じて再構築される。これらの型は、すでに精神病理学の領域で知られている病型に対応する。本論文によるこれらの所見は、失語症患者への、これまで試みられることの少なかった共感的理解への道筋に、方法論的進歩をもたらすものであり、人間をその環境との関わりに沿って解明することを目指した人間・環境学研究科の理念に適ったものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年4月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。